

五月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（桑原正紀選）

蜆 小島 ゆかり 東京

歳寒三友 津 金 規 雄 神奈川

雪淡し喉に湿りののこりたるゆふべを蜆ひとつかみ買ふ
水桶のしじみ身じろぐ気配してつやつやと濃き大寒の月
唇すばめ蜆の汁を吸ふわれを猫の毛深き顔が見てをり
みづうみに雪ふり雪はあたたかく水底の蜆貝を濡らさん
寒中のコロナ自粛のひそひそと春待つひと日ひと日は蜆

星座のごとく 木 畑 紀 子 京都

歌ありて 橘 芳 園 新潟

ひびわれし冬雲からのこぼれ陽がわが栖の埃、反古を照らせり
栖に溜むるあまた歌の実こぼしつつ食みていのちをつなく穴熊
栖から首だして平日一回の餌のいうびんぶつをよるこぶ
魂離れて栖より翔びたつ日のあらむいざなふやうな風花の舞
むすびあふ星座のごとく雁七羽ひきあけのそらはたたきてゆく

依る教へもたざるわれは死ぬ日までの「いま」をかみしめ生きむ
歌ありて少しのしくありし世と思ひ出しある死に際ならむ
その命守らむとしてまどふもの締めたる鯖のうす皮を剥ぐ
足を知れ敵を愛せと老いわれにいよ難きを宗教は説く
雲間より深き青空見えてきて呼びかけたきは死者ばかりなり

☆ ☆

水島 晴子 兵庫

高野 公彦 千葉

皿に載る深むらさきの一輪を食めばたしかな春の香のする
世の中がまるで二つはありさうでならべながめぬ新聞二紙を
ワクチンを打ちたる後のものたゆさゆめに茶碗が割れてこなこな
ポジテイヴな歌を詠めよと夫言ひ消極のわが日々を励ます
殺陣な撮りの場を映し出すドラマ観てすこしたのしげ元テレビマン

杜 沢 光一郎 埼玉

奥 村 晃 作* 東京

同い年の友のせし結果が良しと聞けば真似をせんとす猿真似にはあらず
年寄りのすることの見習ひわれもせんわれもかなりの年寄りなれば
友らがして結果よければ我もせんコロナの三回目の予防注射を
一泊の食事付白内障の手術、勇気を出して老いに刃向かふ
尿の出があまりよくないこのついでに尿道の手術もいかがといはる

武 田 弘 之 神奈川

森 重 香代子 山口

念願の「多磨」全巻を買ったよと電話に仲氏高ぶり告げ来
同い年なれば百まで永らへて歌作らんと誓ひしものを
「コスモス」や総合歌誌に仲さんと歌並び載ることも終はれり
柘二師の大作「尾鷲」冒頭に名をとどめたり仲宗角は

天界に会ひて仲さん驍二さんカンピントンの歌うたひゐん

鳥の持つ強きくちばし我も欲し大地のおもてつつく山鳩
あめんぼの輪を生む水よこの星に水ありて水の深き静けさ
歌詠みは先を急がず人よりも遅れて歩きこの世楽しむ
白髪少年われは草餅のよもぎの匂ひ今も喜ぶ
飛行船(いのち)は銀河ただよへり人に知らえず知らずとも良し

気象庁予報通りに降つて来てたちまち積もる雪道を行く
公園のベンチは雪が積もつて腰下ろす場所どこにもあらず
社務所には庇ひさしがあつてその下の縁に坐つて降る雪見てる
長靴は滑つて転ぶ恐れなく右手に傘差し雪道を行く
氷点下三度の朝はこたえだが撰氏四度の朝は楽だなあ

カーテンを引き籠もれり幹線の遠き響きの伝はりてくる
読みをれば庭の木立に睦びつつ鳴く雀子の声はきこゆる
長椅子に身を横たふる鈍なまごうの年寄ひととなりてしまひつ
段丘を登りきりたるわが息の悶絶躡地びやふち しばらく動けず
防弾ガラスに立春の雲かるやかに流れつつあり音なく静か

温もれる寒夜の臥床に目を覚まし手指のあかぎれ語りは始める
血の滲む指のあかぎれに傷絆を巻きくれて優し住職の子は
ふる里の生家の寺にのこしたる古雛ら如何にきさらぎ吹雪く
介護中に掛けぬし椅子の脚すべり重き怪我負ふおもはざりしよ
「もう一度跳びたい」のことば残したり羽生結弦の四回転半

水量の多寡をわが目でたしかめむ、堰見むためと利根川遡る
堰越える水の白さや 栲綱たぐつのしぶき落下は一入ひとしほ真白
足元の糸のころ草も秋萩も枝垂れ平伏す寸前ぞ「今」
遠望の赤城の稜線かつきりと三時過ぎなる青空区切る
歩きたい、走り出したい！車椅子捨てて旧来の二足歩行に

われよりも老いたる人に追ひ越され自転車のペダル寒風に鳴る
麻雀とパチンコ競馬の四年間 阿呆学生は老いても阿呆
古稀なれば「有楽町で逢いましょう」なども唄はむ昭和に戻り
ゆかりさんがまた受賞せし記事を読む北京五輪の終る朝あしたに
春の花買ひ来て明し五日ほど苛立ち忘れ老いを忘れむ

クラストーといふ語が急に牙を剥きわが身に迫る如月尽を
妻のゐる施設より電話かかりきて迫れる声に陽性を告ぐ
容態の悪化したれば救急車呼べど空きある病院なしと
西多摩にやつと病院見つかりて妻ははるばる搬ばれてゆく
十七年前と異なり救急車に同乗できず妻を見送る

上高井戸陸橋くぐり中の橋ここから先はブルースロード
若者よ悲しい恋のなきがらはそと流すべし春の小川に
老人よ恋なんかせず学ぶべしジェンダーレスとジェンダーフリー
終活をはじめる前に為なければ悲願の〈8020運動〉
しっかりとしっかりといたしたい内閣総理大臣として

六甲、比良、金剛、葛城、吉野、熊野、丹沢、秩父歩いて来たり
富士山、北岳、奥穂高岳、間ノ岳、槍ヶ岳、剣岳、白山登りて来たり
知床の羅臼岳はあこがれ 下見にと来て断念すヒゲマ多くて
鷲尾山、八菅山、経ヶ岳、仏果山近くの山をいまは山歩す
数々の山よお世話になりました今はボランティアす森林の整備に



田 宮 朋 子 新 潟

ひとしきり夜天にさわぐ小雷、大雷のしづまりて、雪
寒雷のとよもす夜半のみづうみに白鳥たちは浮き寝してぬむ
銀鼠の雪雲のした純白のたましひのごと白鳥がゆく
半身を泥によごして白鳥は日がな田中の餌あさりゐる
おほぞらの奥処に泉あるごとく越後平野に雪降りやます

島 田 暉 神奈川

小 山 富 紀 子 京 都

家かげに柚子の黄色の輝きて春の女神の微笑み始む
なんとなくとろけてしまひさうな春両翼拡げて空を飛びたし
やはらかく木の芽けむれる春の日よ木々との会話交はして歩む
苦しみにもだえ狂へる黒雲よそれはわたしの空に棲む鬱
しみじみと道の鏡を見つむれば柘榴が泣きしやうなわが顔

美しき指がピシリと駒を指す指したるのちの盤上の静
十八の歳の差あれど盤上の駒指す手には歳の差見え
相方の耳に口寄せ袖几帳感染恐れぬあでな舞ひぶり
火葬場をお山と言ひし叔母をけふお山へ送る小雪舞ふ中
命伐る音を半日ひびかせて児童公園はパーキングとなる

大 松 達 知 * 東 京

清 水 正 子 神奈川

寡黙にてつまらなかつたあの叔父のようにしずかにはげしくて雪
いくなればプラスチックは情報を、陶器は意味を、伝えるものだ
寝ましょ寝ましょなんでも言つてまだ寝ない 耐陰性を褒められる草
iPhoneを濡れナプキンで拭きましたなぜだろう青い染みがついてる
おじいさんだった、大丈夫かなあ、と花屋に電話して妻が言う

縄文のヴィーナスのやうなフランス十個ひとり占めて冬ごもり
女孫まだ理想の彼に会へぬらし青い鳥探しはゆつくりでいい
祖母われはコロナフレイル明らかなり片足だちが危ふくなりぬ
ゴミ出しの今朝はご近所散歩する役目を終へし給水塔まで
判じ絵は分ならずじまひ謎のまま…君の賀状を文箱に仕舞ふ

小嶋 一郎 佐賀

藤野 早苗 福岡

「四捨五入すればあなたは九十よ」と妻に言はれて梯子を降りる
下剤にて験しとはあれど二日目も続く効果は無しか此たびも
籠り居はどれか一つが欠落す快食、快便、そして快眠
一月に雪のひと粒見ず過ごし尽日けふの日記それのみ
ゴミ出しの時もマスクを嵌めて出て覆面男同士行き合ふ

後藤 美子 北海道

風間 博夫 千葉

八年ぶり積雪一メートルを超えたりとふ昨日より今日へつづく猛吹雪
終日をふぶきて暮れぬJR札幌駅の発着一日ゼロ
びゆうびゆうとまたしんと終日を降り続く雪美し怖し
雪壁に沿ひて急げりむかう側走る車を耳に追ひつつ
直視してうたひ行きたし老いの日々コロナワクチン三回目接種

福士りか 青森

田中 愛子 埼玉

それぞれにカーテンを引きしづかなり時の節目の見えぬ病室
パブロフの犬にあらねど目の前に看護師立てば名告りの姿勢
何をするにしても名前を問はれればいつしか名前は記号のかるさ
窓の内も外も雪色こころから先にしをれていくやうな昼
病室にてひらく安立スハル歌集 大葉子はまだ雪の下です

舌先にさぐりあてたり右頬のうちがは真珠大のしこりを
夜の港またぐ都市としかう高速演歌だなテールランプの赤が流れて
乳房を絞る手つきで洗濯用洗剤詰め替へ袋をしぼる
九十の母を叱れる六十のわれを吐りぬ二十四の子が
裏山が城跡だつたと知らざりしまま迎へたり本卦還りを
大年に降る「鬼洗い」正月は「富とみ下り」へ雨あめあらぬ雨の名
日が照つてゐるのに降つてくる雨は「狐の嫁入り」「虹の小便」
春先の芽吹きうながす「山蒸やまうむし」、無情の雨の「山茶花ちらし」
ながあめの「卵の花腐し」「ゆふだちの「銀竹ぎんちく」こゆきまじる「風花」
詩人岸田裕子詠みたる雨の音ねびとんばちん、しゆるんばらん、おちんとてん
取り忘れとATMに言はれたりお札もたもた取り出しをれば
何かしらの合図なるらし「カチューシャ」がときをり工事現場に流る
風かぜすごき夜をへ情けのかけ茶碗ちawanにてあたたかき白湯をいたたく
可能性ゼロではなしは限りなくゼロに近くてぼたんゆき降る
ぼたんゆき降る今いまころは多からん口マンス詐欺にかかると婦人

水上 比呂美 東京

襟のごと裏を返して包まるる菓子箱に細き紅白の帯

はしけやし新春の上生菓子の(赤い椿)と(白雪うさぎ)

(おひらめ)といふ品書に生菓子の名前が並ぶ(日向)(桐華)

いにしへの宮中びとが食したる(花びら餅)は牛蒡と味噌餡

桐木神楽堂の店主の孝一稜氏は自分自身を(つくり手)と宣らす

鈴木竹志 愛知

急いではいけないといふ声をする若き日より見守りくれし人の
遅れるる列車にありてふと思ふわれの一世も遅れつばなしか
若き日に出会ひし洋画の女優たちその名を今も忘れてをらず
クラウディア・カルデイナーレとふ女優みたりき美貌忘れじ
「ひまわり」はソフィア・ローレン「昼顔」はカトリヌ・ドヌーブだったかしら

原賀 環子 東京

一年にいちど全きわれとなり元日けふの富士山見さく
おにはア外、ふくはア内のわが声のドーナツが浮く節分のよる
六ヶ月なほらぬ傷を身にもてば気分は冬のけものに近し
環子姉あなの悪いくせだよ病院へあすは行けよとおとうとが言ふ
洗濯機に腰かけてゐるエンジェルを見たき夜なり歯をみがきつつ

水上 芙季 東京

目薬をさし滑らかに目を閉ぢぬ今ぬれたのは眼球だらうか

犬の目のやうなカメラが部屋の間ありてなまなまわれに添ひたり

赤い薔薇大きく刺繍されしコート試着してみても買はぬかの子忌

(暖かい)だけで偉大な実家なり斜めがけバッグ提げ会ひに行く

大涌谷の一部になつたごと沈む入浴剤でしゆわしゆわのお湯

大野 英子 福岡

冷めきつた珈琲に湯をつぎ足して味より暖を探る冬の夜

右耳が音なき部屋から捉へをり止まることなき街のいとなみ

部屋が寒いベッドに入りてもなほ寒いカラダが寒いところがさむい

黒鍵のやうに墓石ほせきの影ならば小径の先にある四王寺山

立春ののちにひとひらふたひらが降りておしまひみんなみの雪

松尾 祥子 東京

孫(陽性)濃厚接触者のわれは家に籠もれり罪人のごと

(陰性)と判明しても陋屋ろうおくの二階に籠もり数日耐へる

他人事が自分事となり狼狽す世界は白か黒かのやうに

熱に臥す孫を思へどもかくも詫び詫び詫びる関係各所に

お役所の手続きそれはさうですが保健所はもうパンクしてゐる